研究ノート

ウォーレス・ステグナー、クリエイティヴ・ライティング、冷戦期米日文化外交

吉原　ゆかり

1951年9月1日、サンフランシスコ平和条約が締結される。その前後の時期、書物が共産圏と非共産圏の文化戦争の武器とされた冷戦時代に、フィクションを書くということ、あるいはそれを外国語に翻訳するということには、どのような文化外交上の力学が作用していたのだろうか。この一端を見るために、スタンフォード大学クリエイティヴ・ライティング・プログラムの創始者であり、日本の文壇とも関係をもった、Wallace Stegner（1909-93）の1951年来日前後の動きについての資料を検討する。

つぎの引用は、英米文学・語学研究教育専門誌として、1898年の発刊以来の歴史をもつ『英語青年』が、1951年のステグナー来日を報じる、1952年1月号の記事からのものである。

> 日本文学作品続々海外へ紹介　ウォーレス・ステグナー教授が日本の現代文学作品を同教授のいるスタンフォード大学発行の*Pacific Spectator*で定期的に紹介しようとしていることは既に本欄においても報じたが、具体的な諮問をうけた日本ペンクラブでは、川端康成氏ほか十氏による作品世話人会をひらいた結果、第一回分として次の十二編を英訳して送ることに決定した。▲選定された作品は次のとおり。島木健作「赤蛙」田村泰次郎「肉体の悪魔」大日向葵「マッコイ病院」丹羽文雄「嫌がらせの年齢」原民喜「夏の花」梅崎春生「櫻島」大岡昇平「俘虜記」林芙美子「晩菊」尾崎一雄「虫のいろいろ」平林たい子「鬼子母神」中里恒子「白き暖炉の前」廣津和郎「解散」。なおステグナー教授からは詩、俳句などを*Poetry Magazine*のアジア版に紹介したい旨の申出もあるが、この方の選考は改めて行われる筈。▲これとは別に新潟大学教師W.F.マーカット氏（ウィスコンシン大学出）が中心となり、同大学若手教官たちが『自由学校』の英訳に着手した。これはステグナー教授の支持奨励もあり、追って椎名麟三『永遠なる序章』武者小路実篤『愛と死』などの英訳計画もあると伝えられる。（『英語青年』1952年1月号（44）。下線は吉原による。以下同。）

川端康成の名が、日本文学の英訳に関してステグナーの諮問を受けた日本ペンクラブのメンバーとして挙げられていることが目を牽く。

ウォーレス・ステグナー（Wallace Stegner）は、ピュリッツァー賞を受賞（*Angle of Repose*, 1972）することになる小説家であり、スタンフォード大学クリエイティヴ・ライティング・プログラムの創始者（1946）である。クリエイティヴ・ライティングは、第二次世界大戦後、戦争帰還兵の再教育計画の一部としてアイオワ大学やスタンフォード大学などで設立・制度化された。Eric Bennett は、冷戦期アメリカの大学における創作プログラムの文化的・政治的意義を探った著作、*Workshops of Empire: Stegner, Engle, and American Creative Writing During the Cold War*（2015）で、"Anxieties about totalitarianism, the containment of Commuism, the repudiation of American radicalism, the newly powerful mass culture, and the nature of literature all contributed to the contours of the emarging discipline"（8）がクリエイティヴ・ライティングの高等教育における制度化の背後にあったとしている。ベネットは、ステグナーの 1951 年来日の事情について、"The Humanities Division of the Rockefeller Foundation under [Charles Burton] Fahs sponsored Wallace Stegner to travel as an ambassador for modernist literature to Japan"（69）と述べている。ステグナーの来日を、資金的にもそしておそらく思想的にもバックアップしていたのが、ロックフェラー財団であり、同財団人文科学部門ディレクター Charles Burton Fahs（1908-1980）である。

本研究ノートで報告する内容は、筆者の研究課題である、冷戦時代アジアにおけるアメリカ合衆国の文化外交研究へと発展させていくことを予定しているものである。ステグナーと同時期にスタンフォード大学に所属していた、George H. Kerr（1911-92）が、「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」（1950-56）設立において果たした役割については、拙稿「1930 年代～ 50 年代のジョージ・H・カーと環太平洋文化交渉の地政学」（筑波大学大学院　人文社会科学研究科　文芸・言語専攻　紀要『文藝言語研究　文藝編』70, 2016）で明らかにした通りであるが、カーの「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」設立をめぐる、冷戦初期のより広い社会文化政治文脈について調査を進めるうち、ステグナーもまた、アメリカ合衆国と日本との文化交流の国際力学を考える上で、見逃がさざるべき人物であることを発見した。

ステグナーの来日時の記事をここで参照したい。

> Stegner 博士来日　作品 *Ducklings with Blue Wins* によって、1950 年度 O. Henry 賞第一位を獲得したアメリカの新進短編作家 Dr. Wallace Stegner は（中

略）Rockefeller Foundation から委嘱されて、世界の文章家と連絡をとるため、昨年八月から、独、仏、伊、エジプト、インド、タイ、フィリピンなどの諸国を廻って、わが国に来たもので、「日本の文学はアメリカに知られていないので、その勉強をするのと、文章家、出版人などが今後アメリカの文化人ともっと緊密な連絡をとれるようにする目的でやって来た」と言っている。△なお同博士は、二十四日（水）から約一週間、六回にわたって東京慶應大学で、「アメリカ文学の伝統」「現代アメリカ文学の主流」「現代アメリカ文学者の課題」「アメリカ文芸ジャーナリズム」などについて講演した。（『英語青年』1951 年 3 月号（141））

最後に言及されている講演会をまとめたものが、Stegner, *The Writer in America* (Tokyo: Hokuseido Press, 1952) である。日本人読者向けに同書に注釈をつけた平松幹雄 (1903-96) は慶応大学教員、のちの 1953 年に第 25 回国際ペンクラブ・ダブリン（アイルランド）大会に代表として出席している。その大会でのテーマは、「広く使われていない国語をもつ国々の文学」であった（日本ペンクラブ　http://www.japanpen.or.jp/about/works/post_5.html）。ステグナーが日本文学の英語訳計画を進めるにおいて、助言を依頼したのが日本ペンクラブであることと、平松が「広く使われていない国語をもつ国々の文学」テーマで開催された国際ペンクラブ大会に出席していることのあいだには、なんらかの関係があると予想される。

冒頭に引用した記事にあるように、ステグナーの委嘱をうけて、英訳が推奨される日本文学作品を選定したのは、「川端康成氏ほか十氏による作品世話人会」であったが、のちに川端康成は 1957 年に国際ペンクラブの副会長となり、大会を日本で開催することになる。ステグナー小伝（Wallace Stegner Biography http://www.montana.edu/　history/stegner_biblio.html）によれば、川端作品のいくつかが *The Atlantic Monthly* 誌に英訳掲載される手はずを整えたのはステグナーであり（Edward Seidensticker による『伊豆の踊り子』抄訳（1952）など）、1972 年川端の自死にいたるまで、ステグナーと川端は文通を続けていたという。

『英語青年』1951 年 9 月号の以下の記事からは、ステグナーの来日と、ロックフェラー財団の強い結びつきがうかがわれる。アメリカ文学作品の翻訳紹介や書籍贈与が、アメリカの日本に対する文化外交の大きな一翼を担っていたことと、ステグナーが中心となって推し進めた日本文学作品の英訳は、表裏一体をなしたものであることが了解される。

ステグナー氏文学交流に努力　去る二月ロックフェラー財団の後援で来日、

慶應大学で講演をした、Wallace Stegner 氏は四ヶ月に亘るアジア各国を視察旅行して帰国後東京新聞に書簡を寄せ、文学交流に努力する旨を明らかにした。それによれば、(一) 米国の文学作品を翻訳紹介したい希望者にはあらゆる便宜を計る。(二) 大学、図書館などが連絡を希望する米国内の各機関との間をあっせんする。(三) 出来るだけ、書籍の贈与交換を促進する、というのである。その手始めとして、Stanford 大学機関誌 *Pacific Spectator* に毎号アジア作家紹介欄が常設され、これに倣う日本雑誌には援助が与えられるという。(1951 年 9 月号 (428))

この記事を上下から挟むようにして、「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」の、スタンフォード大学側の中心人物である John Goheen 教授の来日、「海外との文化交流の促進」などを目的として近く誕生する「仮称外国文学協会」に関する記事が掲載されている (英文学関係発起人として、阿部知二、土居光知、福原麟太郎、市河三喜、中野好夫など)。

つぎに、インターネット上で閲覧することのできる、スタンフォード大学学内誌 *The Stanford Daily* (http://stanforddailyarchive.com/) に掲載された、ステグナー来日関連の記事を確認することにより、アメリカの側から見た場合の、ステグナー来日の意義を探りたい。

以下の記事では、植民地状況に置かれ「植民地的依存状態」にあるアジア諸国が、独立した共和主義的 (republican) 政府を樹立していくプロセスにおいて、文学が果たすべき役割を探ることが、ステグナーのアジア派遣の目的であるとされている。

> Dr. Stegner points out that most of the countries they will visit [India, Siam or Indonesia, the Philippines and Japan] have been colonial dependencies until lately, and it is part of the Stegner's purpose to discover what part literature has played, is now playing, and may later play in the intellectual ferment accompanying the formation of independent republican governments. (*The Stanford Daily*, Vol. 117, Issue 48, 4 May 1950)

文学作品の内在的価値以上に、文学作品が文化政治的状況のもとで持ちうる意義や機能が重視されていたことが了解される。

当時、アメリカ大学キャンパスでは「自由」の意義が問われていた。1949 年、カリフォルニア大学評議委員会 (board of regents) が教員などの雇用者に、共産主義を含めた反政府的団体の成員ではないと誓言する署名を要求したことから巻き起

こったThe Royalty Oath Controversy（1949-1951）は、1950年に署名を拒否した30人の教員が解雇されるという結果を生んだ。スタンフォード大学でのThe United States National Student Association（NSA）（1947-1978）主催の学問の自由と言論の自由をめぐるフォーラムでは、ステグナーは、カリフォルニア大学評議委員会の方針を批判、言論の自由を弁護する立場を表明している（Vol.117, Issue 52, 10 May 1950）。このフォーラムを主催したNSAは、中央情報局(CIA)から資金援助を受けていたことがのちに明らかになった（Aryeh Neler, "When the Student Movement was a CIA Front," *The American Prospect*, April 14, 2015 http://prospect.org/article/when-student-movement-was-cia-front）。

1951年3月、帰国後のステグナーのアジア文学状況に関する報告講演を報じる記事では、ステグナーは、アジアの文学状況を理解するためには、政治状況に関する理解が不可欠であると主張しているとされている。

> [Stegner said] no matter how impartially one looks at the strictly creative side of Asian intellectual life, current politics ultimately color one's judgement.... Japan, partly because of a calm political atmosphere and partly because of widespread literary, is enjoying the most active intellectual life of any country in Asia....Dr. Stegner characterized India as confused intellecturally. / There is, however, a general interest in "proletarian literature," indicating... a political inclination leftward. (*The Stanford Daily*, Vol. 119, Issue 56, 15 May 1951)

日本は政治状況が安定しており、識字率が高いために、他のアジア諸国より知的生活が活発である一方、「知的混乱」状態にあるインドでは「プロレタリア文学」への関心が高まっており、左傾傾向が見られるとしているこの記事に見られるのは、ステグナーの、知的活動の健全性を親アメリカ性と関連づけようとする傾向だろう。

"Stegner Urges Increased Asian Literary Exchange" と題された次の記事では、文学、とくにアメリカ文学を、反共政策の道具として活用するべしとする意識がより明らかである。

> One example of misunderstanding between Asia and the United States...is the fact that Communists often use books by Caldwell and Steinbeck and other American "proletarian writers" as anti-American propaganda. To correct this situation and other equally serious misunderstandings, Dr. Stegner advised sending as much good American literature as possible to Japan, the Philippines, and

especially India.... Asia is beset with political chaos which adds to the difficulties involved in developing a culturally conscious public.... Japan... is a "nation of readers," and has an active intellectual life, offering a contrast to the rest of Asia. (*The Stanford Daily*, Vol.119, Issue 57, 16 May 1951)

共産主義者はコールドウェルやスタインベックを「プロレタリア作家」として位置付け、反アメリカプロパガンダに悪用している。この状況を逆転するためには、大量のアメリカの良書をアジアに贈るべきである。本が反共政策の武器である文化冷戦下において、日本はアメリカの意向に沿える「読書人の国」となることが期待されている。

"Asian Student Questions Stegner Speech" では、本人の希望で匿名で寄せられた、アジア人スタンフォード学生による、ステグナー批判が見られる。ステグナーの、文学を通したアジア・アメリカ文化交流唱導が、アメリカの政治的覇権に支えられたものであることを批判する、アジア出身者からの反問として貴重である。

Speaking as an Asian, I find that all young Asians are relatively very "literature-hungry." Not only are the local writers and authors widely read, but the works of the Western bards and sages devoured with interest...An Asian knows more about American and the West than an American knows about China, India, and the East.... [T] here is a sincere effort on the part of every Asian to understand American and the West[.]

This is more than can be said for Americans. American are quick at learning the fact and hitory of a nation, only when they are at war with or against that nation. If instead, this knowledge was collected under normal conditions, a friendly tie would be bound to grow up between the nations.

AN ASIAN STUDENT

(Name withheld by request)

(*The Stanford Daily*, Vol.119, Issue 58, 17 May 1951)

この匿名のアジア人学生は、ステグナーがアジアの文学状況（日本を例外とする）に下した否定的な評価に対して批判的であり、西洋とりわけアメリカの、アジア文学状況に関する無知に基づいた独断を、アメリカの軍国主義とも関係したものだとして、辛辣に論難している。

The Stanford Daily には同時期のステグナーの活動を知ることのできる記事が、こ

こで挙げた記事以外にも複数あり、『英語青年』そのほかの日本メディアにも、ステグナー来日に関する、ここで挙げた記事以外の記事があるものと予想される。スタンフォード大学には、"Wallce Earle Stegner papers: concerning the Asian-American Literary Exchanges, 1949-1954"（http://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/ft4f59n6kz/admin/）が残されており、前述した慶應大学の平松幹雄や清岡瑛一、『英語青年』の研究社や、英米文学を専門とする北星堂、日本人作家や翻訳者との書簡が収められている。1953 年の *Poetry Magazine*, Asian Issue 関連の書簡やマニュスクリプトは、冒頭に引用した記事で「ステグナー教授からは詩、俳句などを *Poetry Magazine* のアジア版に紹介したい旨の申出」と述べられている出版計画に関係するもので、*Poetry Magazine*1956 年 3 月号に結実したものと思われる（https://www.poetryfoundation.org/poetrymagazine/toc/ detail/70841）。この号には、山之口貘、谷川俊太郎、金子光晴、島崎藤村、西脇順三郎、三好達治、中野重治、高村光太郎、室生犀星、萩原朔太郎などの詩作品の英訳が掲載されており、いくつかの作品の英訳はアイオワ大学クリエイティヴ・ライティング・コースの学生で、ロックフェラー奨学金を受けていた Sato Satoru（詳細不明）が行っている。冒頭の引用で、「虫のいろいろ」の英訳が推薦されたという尾崎一雄や、ステグナーのもとで学んだ向井啓雄（国際会館勤務）との書簡も残されている。

ステグナーを中心人物のひとりとして繰り広げられた、文学を通した米日の文化交流とその政治学の全体像を把握するためには、上記のような資料の精査が必要である。

注記：すべてのインターネット情報への最終閲覧日は 2016 年 11 月 23 日